



紀ノ川に抱かれた紀州五十五万五千石の和歌山城。その優れた文化と教育環境で幼少期の熊楠は「知」の芽を開花させた。

和歌山城下の老舗酒蔵に、熊楠のルーツを探る。

熊楠から常楠に宛てられた手紙。熊楠に関する書類などは、戦時の空襲でほとんど消失してしまったという。アルバム写真の右が、常楠と思われる。



社屋や蔵のある土地は藩主になる吉宗の屋敷跡、藩校跡だった場所という。



①「世界一統」は、早稲田大学出身の常楠が師と慕った大学創業者、大隈重信の名付け。
②南方康治さんは、120年以上続く「世界一統」の6代目社長。



実直な家風は酒造りにも生かされ、最高吟醸酒は日本酒業界最大規模の日本酒コンテスト「全国新酒鑑評会」で近年では、平成16～19年、21年と、5度の金賞受賞。熊楠の粘菌画や肖像写真などを生かしたパッケージは、すぐれたグラフィックデザインとして評価も受ける。右は、特撰本醸造「熊楠」。左は、特醸大吟醸「熊楠」。

熊野のイメージが強い熊楠だが、生まれ育ったのは和歌山市。熊楠研究者で和歌山市立博物館主任学芸員の武内善信さん(55)は、「紀州藩御三家の城下町で生まれたからこそ、幼少期に『和漢三才図会』など高価な書物や優れた文化に簡単に触れることができた」と語る。「日本人の可能性の極限」と民俗学者の柳田国男にいじめられた熊楠のルーツは城下町・和歌山市にあったのだ。

そんな和歌山市で、熊楠の生家は今、紀州の銘酒ブランドを生む蔵元として愛される。明治17年、父・弥兵衛が創業した酒造会社「世界一統」(旧・南方酒造)だ。

南方家三男で2代目の常楠は兄思いで知られ、次男・熊楠の自由奔放な研究と生活全般を、経済面から献身

的に支えた。現、6代目の南方康治社長(61)は「常楠も追求する向学心があつたが、世話好きで人をほっておけない性格。だから、海外にまで飛び出した熊楠を認め、支えることができたのでしよう」と、笑う。

7代目は現在、統括本部長として製造責任者を務める息子の雅博さん(34)。「海や山に囲まれ、これほど恵み豊かな地はない」と、開発に力を入れているのが、県内各地の果物から造る日本酒ベースのリキュール酒だ。南

方家の創業酒が有田ミカンで造った「蜜柑酒」だということは意外と知られていない。創業時の心意気に再び息を吹きかけ、「地域再生」もふまえて産地とともにPRする「和歌のめぐみ」ブランドを立ち上げた。

「研究も酒造りも同じ感性の世界。熊楠のように人付き合いから感性を学び自分の糧にしたい」と、雅博さん。南方家に受け継がれる実直さと、時代を先どりしたもののづくりの思考もまた、熊楠のルーツなのだ。

